

グループワークにおける対人ストレスの様相に関する研究

永峯卓哉・坂本仁美

長崎県立大学看護栄養学部看護学科

Research on aspects of interpersonal stress in group work

Takuya NAGAMINE, Hitomi SAKAMOTO

Department of Nursing Science, Faculty of Nursing and Nutrition,
University of Nagasaki, Siebold

要 旨

看護基礎教育を受ける大学と専門学校の学生 641 人（回答率 95.8%）を対象に自記式質問調査によってグループワーク（GW）における対人ストレスについて調査し、集団活動における対人ストレスの様相を明らかにするとともに、教育施設の違いや GW 好き嫌いとの関連性についても分析した。また GW における対人ストレス内容について調査項目を検討した。

GW 好き嫌いでは、比較的 GW が好きな学生が多かった。GW 対人ストレス内容 30 項目では、因子分析の結果 4 因子が抽出できた。因子別の平均点では、『配慮過多による疲労』3.35 点、『非難攻撃』3.73 点、『不信劣等』3.37 点、『気掛かり』2.88 点であり、GW 好き嫌いとの有意な相関があり、対人ストレスの経験が多いほど GW は嫌いであった。他者から「嫌われること」やメンバー同士が「傷つくこと」を避けるような行動をすることで、無難に GW を終わらせることを優先し、相手を非難したり攻撃したりするようなことは避けていた。しかし、GW による課題解決や創造性が疎かになってしまっている状況が鑑みられた。

因子分析の結果、寄与率や信頼性も高く、GW における対人ストレスを調査する指標として十分だと思われるが、項目、質問内容や文言の再検討が必要と考える。

キーワード：グループワーク、対人ストレス、グループワークの好き嫌い、因子分析

緒言

将来社会人として積極的に協働しながら課題解決できる人材の育成を目指し、大学教育改革の旗印のもと、多くの大学では、アクティブラーニングに代表される、学生中心の双方向型授業や学生が能動的に活動する学生参加型授業を取り入れている。溝上¹⁾は「アクティブラーニング」を、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」と定義している。認知プロセスの外化のためには、多くの場合、集団活動を中心に、対人関係の相互作用を効果的に活用した学習方法を用いる。アクティブラーニングの効果を左右するのは、集団活動への学生の積極的で主体的な参加と、活動内での学生同士の生産的なやり取りである。そのような集団活動が行われるために、活動内での個人的要因による対人的力動性を整える必要がある。

この場合、考えられる個人的要因として学生個々の能力や集団活動に対する態度などがあり、特に集団活動に対する好き嫌いが、その成果に影響する可能性が考えられる。

大学生を含む青年期には発達課題があり、対人関係そのものが強いストレスラーとして認識され、対人関係に起因するストレスとその対処も重要なテーマとなる。ラザルス²⁾は、ソーシャルサポート(ポジティブな関係)がストレス反応を低下させることを指摘しているが、対人関係でのネガティブな評価は、ストレス反応を増大させ対人ストレスとなる。また、最近の青年期の間人関係の在り方については、心理学的には「ふれあい恐怖的心性」³⁾という枠で説明される。表面的な会話や身近な人との付き合いはでき、特にインターネットやSNSでのよく知らない人とのコミュニケーションは得意だが、深い人間関係を築けない。強い承認欲求はあり誰かとつながっていたいという気持ちは持っているが、人付き合いに臆病で強い孤独感に苛まれていることが多い。このような状態になる要因として、幼少期からの人間関係の狭さ希薄さに加え、インターネットの普及によって対面でのコミュニケーションが減少し一人で過ごす時間

が増加することで、さらに対人コミュニケーション能力を磨く機会が減少していることがあげられる。また強い承認願望はあるが、「嫌われること」「失敗すること」「傷つくこと」に対する恐怖感を持っていることも要因と考えられている。これらには、過大な同調圧力の影響も指摘されている^{4) 5)}。「嫌われること」「失敗すること」によって他者から阻害される不安を持つことで集団内のメンバーが相互に規制し合い、他とは違う意見や行動をできるだけ避けるようになる。そこには個人の主体性や相互の軋轢を解消するような話し合いは存在しない。このような青年期がもつ個人的要因と対人関係における力動的な影響が働く中では効果的な集団活動は成り立ちにくく、アクティブラーニングのような、話し合いによる学習の深まりも期待できない。

対人ストレスについて橋本⁶⁾は、送り手の意図も受け手の評価もネガティブである対人関係と称している。さらに橋本⁷⁾は青年期の対人関係の中でストレスとなる出来事として、対人ストレスイベントについて分類している。対人ストレスは、対人葛藤、対人劣等、対人摩擦の3種類からなり、それらはソーシャルスキルと関連している。対人葛藤は他者の行動に起因した、社会の規範からは望ましくない顕在的な対人葛藤に関するものであり、対人劣等は、主体側に起因する劣等感を触発する事態やスキルの欠如に関するものである。対人摩擦とは、日常的によく起こる社会的規範からはさほど逸脱していない配慮や気疲れをとまなう対人関係がストレスとなっている事態のことである。橋本の対人ストレスは大学生の日常生活で起こる出来事を分類しているが、今回は集団活動中で生じている対人ストレスイベントについて検討する。

大学生の日常生活では対人関係を避けて生活することもできる。特にコロナ禍では、対面での接触を極力避けるような生活を強いられており、ここ数年間は対人ストレスも減少したのではないかと推察できる。しかし、授業内で実施される集団活動は必ず参加する必要があり、避けられない状況が存在している。そのような集団活動で生じる対人ストレスイベントには、日常生活での対人ストレスとは異なった様相が予想され、これまで調査した研究報告はない。

そこで今回、看護基礎教育を受ける学生を対象にグループワーク(以下、GW)における対人

ストレスの具体的内容について調査し、集団活動における対人ストレスの様相を明らかにするとともに、GW好き嫌いとの関連性についてもあわせて分析した。またGWにおける対人ストレス内容について調査項目を検討することを目的とした。

方法

1. 調査対象

2019年度および2020年度に在籍するA大学看護学科学生310人、および2019年度に在籍するB専門学校生360人を対象とした。

2. 調査方法

学年ごとに講義終了後、講義室に残ってもらい、研究の趣旨・目的等を説明したのち無記名自記式調査票を配布した。同意が得られた場合のみ調査票に回答し、一定期間内に提出してもらった。

3. 調査内容

1) 基本情報

教育施設、学年等について設定した。

2) グループワーク (GW) 好き嫌い

「GWが好きか嫌いか」について「1:全く好きではない」から「4:とても好き」の4件法で調査した。

3) GW対人ストレス内容

橋本⁷⁾の対人ストレスイベント尺度と久田他⁸⁾のストレスサー尺度を参考に、特に集団活動で感じる対人ストレスイベントについて検討し、GWにおいて体験する対人ストレス項目を30項目選定した。回答は「1:よく起こった」から「4:起こらなかった」の4件法とした。

4. 分析方法

GW好き嫌いについては、「GWが好きか嫌いか」の「1:全く好きではない」から「4:とても好き」の回答を1点から4点で点数化し、点数が高いほどGWが好きとなるようにした。また、回答の「1・2」を嫌い、「3・4」を好きと2群に再分類した。

GW対人ストレス項目については、「1:よく起こった」から「4:起こらなかった」の回答を1点から4点で点数化し、点数が低いほど対人ス

トレスがよく起こっているようにした。GW対人ストレス項目については、因子分析によって因子の抽出を行った。

点数化した調査項目について、基本統計量を算出するとともに、施設間差、GW好き嫌いで比較や項目間の関連性を検討した。2群間の差はt検定、2変量の相関については、Pearsonの積率相関係数を用いた。

統計的分析は、IBM SPSS ver.29.0 for Windowsを用い、有意確率5%とした。

5. 倫理的配慮

調査対象者には、研究目的・方法、協力の任意性、研究協力に伴う負担並びに予測されるリスク・利益、個人情報の取り扱い、研究参加は任意であり、参加・不参加による一切の不利益を被らないこと、とくに成績とはまったく関係しないこと、研究成果の公表について口頭及び文書で説明した。

また、研究終了後、研究資料は施錠できる書庫に5年間保管後、紙面および分析結果はシュレッダーで破棄することを説明した。

本調査は、無記名で行うが、経年変化分析のため、学籍番号の記載を求めたが分析の段階でリナンバーリングを行い、個人が特定されないように配慮した。

A大学一般研究倫理委員会の承認(承認番号358)を得た。

結果

1. 対象者概要

A大学学生297人(回答率95.8%)、B専門学校生344人(回答率95.6%)、合計641人(回答率95.7%)であった。

2. GW好き嫌い

GW好き嫌い回答の「1・2」を嫌い、「3・4」を好きと2群に再分類した結果、無回答3人を除き、嫌い175人(27.4%)、好き463人(72.6%)であった。

GW好き嫌いの平均(SD)点では、全体で3.44(0.53)点、A大学3.22(0.74)点、B専門2.72(0.84)点であり、A大学とB専門を比較すると、 $t(637) = 8.04, p < 0.001$ と有意差があった。

3. 対人ストレス内容

GW 対人ストレス 30 項目の平均 (SD) は、全体 3.44 (0.53) 点、A 大学 3.60 (0.45) 点、B 専門 3.30 (0.56) 点で、A 大学と B 専門を比較すると、 $t(637) = 7.598$ 、 $p < 0.001$ で有意差があった。

GW 対人ストレス内容が多い項目 (表 1) は、「あまり親しくない人と GW した」2.66 (1.04) 点、「G メンバーが嫌な思いをしていないか気になった」2.88 (1.03) 点、「G メンバーが自分のことをどう思っているのか気になった」2.89 (1.02) 点までが 2 点台であった。これらは、より多く体験しているストレス項目である。

GW 好き好き嫌いとの関連性では、30 項目すべてで有意な相関があったが、中でも「GW の時間がとても苦痛だと感じた」との関連性が相関係数 0.555、 $p < 0.001$ と有意なやや強い相関関係があった。

4. 対人ストレス内容の因子構造 (表 2)

GW 対人ストレス 30 項目について、重みなし最小二乗法、Kaiser の正規化を伴うバリマックス回転によって因子分析を行った。

分析の結果、4 つの因子が抽出できた。第 1 因子は「テンポの合わない人と GW をした」「GW に参加しないメンバーにイラついた」など 11 項目で構成され、『配慮過多による疲労』因子と解釈した。第 2 因子は、「G メンバーから責められた」「G メンバーに軽蔑された」など 10 項目で構成され、『非難攻撃』因子と解釈した。第 3 因子は、「GW 中何をしゃべったらいいのかわからなくなった」「G メンバーとどのように付き合えばいいのかわからなくなった」など 7 項目で構成され『不信劣等』因子と解釈できた。第 4 因子は、「G メンバーが嫌な思いをしていないか気になった」「G メンバーが自分のことをどう思っているのか気になった」の 2 項目で構成され、『気掛かり』因子と解釈できた。

表1 GW対人ストレスと好き嫌いとの相関 (経験が多い順)

質問項目	平均値	SD	相関係数	p値
Q22あまり親しくない人とGWした	2.66	1.04	0.33	**
Q12Gメンバーが嫌な思いをしていないか気になった	2.88	1.03	0.21	**
Q11Gメンバーが自分のことをどう思っているのか気になった	2.89	1.02	0.23	**
Q18GWで自分の言いたいことが、相手にうまく伝わらなかった	3.14	0.89	0.28	**
Q8Gメンバーと意見が食い違った	3.17	0.93	0.21	**
Q16GW中、何をしゃべったらいいのかわからなくなった	3.18	0.92	0.33	**
Q20テンポの合わない人とGWをした	3.20	0.93	0.33	**
Q14GW中に気まずい沈黙があった	3.25	0.88	0.29	**
Q27GWに参加しないメンバーにイラついた	3.30	0.92	0.31	**
Q30GWの時間がとても苦痛だと感じた	3.37	0.88	0.56	**
Q21嫌いな人とGWをした	3.39	0.93	0.32	**
Q24無理にGメンバーに合わせた会話をした	3.40	0.80	0.33	**
Q26メンバーが課題と全く関係のないことをして予定通り進まなかった	3.41	0.82	0.32	**
Q15Gメンバーとどのように付き合えばいいのかわからなくなった	3.44	0.81	0.38	**
Q17Gメンバーに対して劣等感を抱いた	3.47	0.82	0.30	**
Q25Gメンバーに深入りされないように気を使った	3.48	0.77	0.26	**
Q28Gメンバーに信頼されていないのではないかと感じた	3.51	0.73	0.29	**
Q10誰が悪いというわけでもないとき、自分から謝った	3.54	0.74	0.13	**
Q19Gメンバーに嫌な思いをさせた	3.56	0.64	0.27	**
Q23メンバーから自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされた	3.57	0.73	0.25	**
Q29Gメンバーのことが信頼できないと思った	3.61	0.65	0.33	**
Q5Gメンバーが無責任な行動をした	3.62	0.71	0.29	**
Q13Gメンバーから疎外されていると感じるようなことがあった	3.62	0.69	0.28	**
Q7Gメンバーにいやな顔をされた	3.70	0.63	0.29	**
Q9Gメンバーから約束を破られた	3.72	0.58	0.23	**
Q1Gメンバーに無理な要求をされた	3.73	0.54	0.21	**
Q6Gメンバーに誤解された	3.77	0.53	0.20	**
Q2Gメンバーと喧嘩した	3.82	0.48	0.15	**
Q3Gメンバーから責められた	3.85	0.43	0.23	**
Q4Gメンバーに軽蔑された	3.88	0.36	0.20	**

注) 相関係数は、GW好き嫌いとの相関で ** $p < 0.01$ を示す。

因子寄与率は、第1因子から、18.70、18.02、14.25、8.35であり、4因子の累積寄与率は59.3%であった。

因子の信頼性係数クロンバック α は、第1因子0.93、第2因子0.90、第3因子0.91、第4因子0.89であった。

因子別の平均点（表3）では、全体で『配慮過多による疲労』3.35（0.64）点、『非難攻撃』3.73（0.42）点、『不信劣等』3.37（0.65）点、『気掛かり』2.88（0.96）点であった。A大学とB専門で比較すると、『配慮過多による疲労』はA大学3.57（0.53）点、B専門3.15（0.66）点、『非難攻撃』はA大学3.81（0.35）点、B専門3.66（0.46）点、『不信劣等』はA大学3.53（0.55）点、B専門3.124（0.69）点、『気掛かり』はA大学3.07（0.93）点、

B専門2.72（0.96）点であり、4つの因子ともに施設間で有意差（ $p<0.001$ ）があった。

GW好き嫌いの2群での比較では、『配慮過多による疲労』は「GW好き」3.47（0.57）点、「GW嫌い」3.02（0.70）点、『非難攻撃』は「GW好き」3.79（0.35）点、「GW嫌い」3.56（0.52）点、『不信劣等』は「GW好き」3.53（0.52）点、「GW嫌い」2.97（0.76）点、『気掛かり』は「GW好き」3.02（0.90）点、「嫌い」2.52（1.04）点であり、4因子すべてで有意差（ $p<0.001$ ）があった。

また、GW好き嫌いの点数と、4つの因子の関連性では、相関係数が『配慮過多による疲労』0.391、『非難攻撃』0.275、『不信劣等』0.437、『気掛かり』0.231であり、すべてが統計的に有意（ $p<0.01$ ）であった。

表2 GW対人ストレス内容の因子分析結果

因子	質問項目	第1因子 $\alpha=0.93$	第2因子 $\alpha=0.90$	第3因子 $\alpha=0.91$	第4因子 $\alpha=0.89$
第1因子 配慮過多による疲労	Q20テンポの合わない人とGWをした	0.732	0.214	0.290	0.165
	Q27GWに参加しないメンバーにイラついた	0.692	0.290	0.236	0.170
	Q21嫌いな人とGWをした	0.674	0.317	0.332	0.065
	Q24無理にGメンバーに合わせた会話をした	0.638	0.160	0.362	0.238
	Q29Gメンバーのことが信頼できないと思った	0.601	0.366	0.340	0.150
	Q23メンバーから自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされた	0.588	0.420	0.200	0.183
	Q5Gメンバーが無責任な行動をした	0.579	0.509	0.097	0.064
	Q26メンバーが課題と全く関係のないことをして予定通り進まなかった	0.542	0.275	0.271	0.174
	Q25Gメンバーに深入りされないように気を使った	0.522	0.218	0.365	0.227
	Q8Gメンバーと意見が食い違った	0.482	0.395	0.198	0.297
Q22あまり親しくない人とグループワークした	0.451	0.081	0.403	0.192	
第2因子 非難攻撃	Q3Gメンバーから責められた	0.140	0.804	0.216	0.072
	Q4Gメンバーに軽蔑された	0.104	0.768	0.266	0.051
	Q6Gメンバーに誤解された	0.233	0.661	0.213	0.281
	Q7Gメンバーにいやな顔をされた	0.301	0.652	0.308	0.186
	Q2Gメンバーと喧嘩した	0.275	0.649	0.061	0.097
	Q1Gメンバーに無理な要求をされた	0.365	0.611	0.116	0.120
	Q9Gメンバーから約束を破られた	0.429	0.577	0.129	0.150
	Q10誰が悪いというわけでもないとき、自分から謝った	0.296	0.451	0.201	0.399
	Q19Gメンバーに嫌な思いをさせた	0.329	0.435	0.394	0.312
	Q13Gメンバーから疎外されていると感じるようなことがあった	0.236	0.451	0.461	0.312
第3因子 不信劣等	Q16GW中、何をしゃべったらいいのかわからなくなった	0.200	0.110	0.759	0.170
	Q15Gメンバーとどのように付き合えばいいのかわからなくなった	0.346	0.268	0.681	0.193
	Q14GW中に気まずい沈黙があった	0.326	0.269	0.583	0.194
	Q30GWの時間がとても苦痛だと感じた	0.473	0.249	0.527	0.141
	Q17Gメンバーに対して劣等感を抱いた	0.277	0.251	0.506	0.299
	Q18GWで自分の言いたいことが、相手にうまく伝わらなかった	0.326	0.221	0.493	0.332
	Q28Gメンバーに信頼されていないのではないかと感じた	0.348	0.303	0.493	0.369
第4因子 気掛かり	Q12Gメンバーが嫌な思いをしていないか気になった	0.223	0.155	0.267	0.794
	Q11Gメンバーが自分のことをどう思っているのか気になった	0.161	0.162	0.388	0.714
	因子寄与	5.610	5.407	4.276	2.506
	因子寄与率	18.702	18.024	14.254	8.353
	累積寄与率	18.702	36.725	50.979	59.332

因子抽出法: 重みなし最小二乗法

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

8回の反復で回転が収束

表3 GW対人ストレス因子との関連性

	合計 (641人)		GW好き嫌いとの相関	
	平均点	SD	相関係数	p値
配慮過多による疲労	3.35	0.64	0.391	<0.01
非難攻撃	3.73	0.42	0.275	<0.01
不信劣等	3.37	0.65	0.437	<0.01
気掛かり	2.88	0.96	0.231	<0.01

	A大学 (297人)		B専門学校 (344人)		A大学とB専門の比較		
	平均点	SD	平均点	SD	t 値	自由度	p値
配慮過多による疲労	3.57	0.53	3.15	0.66	9.021	636	<0.001
非難攻撃	3.81	0.35	3.66	0.46	4.726	629	<0.001
不信劣等	3.53	0.55	3.24	0.69	5.932	634	<0.001
気掛かり	3.07	0.93	2.72	0.96	4.649	631	<0.001

	GW好き (463人)		GW嫌い (175人)		好き嫌いの比較		
	平均点	SD	平均点	SD	t 値	自由度	p値
配慮過多による疲労	3.47	0.57	3.02	0.70	-7.613	267	<0.001
非難攻撃	3.79	0.35	3.56	0.52	-5.409	235	<0.001
不信劣等	3.53	0.52	2.97	0.76	-9.040	239	<0.001
気掛かり	3.02	0.90	2.52	1.04	-5.623	278	<0.001

考察

看護基礎教育を受ける学生 641 人を対象に自記式質問調査によって GW における対人ストレスの具体的内容について調査し、集団活動における対人ストレスの様相を明らかにするとともに、教育施設の違いや GW 好き嫌いとの関連性についてもあわせて分析した。また GW における対人ストレス内容について調査項目を検討した。

1. 集団活動における対人ストレスの様相

看護学教育では、教授方法の一つとして GW を取り入れることが多い。GW を中心とした集団活動において教員が意図的なかかわりを何もしなければ、活動が阻害され、学習効果が減弱すると考えている。教員は、効果的な GW が実施できるようにメンバー構成や活動方法などに関する知識を備えておかなければならない。GW の良し悪しに関与する要素の一つとして、学生の個人的特性と対人関係の中で生じるネガティブな出来事である対人ストレスがある。

今回、GW における対人ストレスについて調査した。学生が授業内で実施される GW 内で、どのような対人ストレスを多く経験しているかについて分析すると、「あまり親しくない人と

GW した」、「G メンバーが嫌な思いをしていないか気になった」、「G メンバーが自分のことをどう思っているのか気になった」といった経験を多くしていることが分かった。これらは今回抽出した因子では、『気掛かり』因子に含まれる項目であり、学生が GW 中に「嫌われること」「失敗すること」「傷つくこと」に対する恐怖感を持っていること⁴⁾が影響していると考えられる。他者から「嫌われること」やメンバー同士が「傷つくこと」を避けるような行動をすることで、波風立てずに無難に GW を終わらせることを優先している結果ではないかと考える。一方で、『非難攻撃』因子に含まれる、メンバーから「軽蔑される」「責められる」や「メンバーと喧嘩した」などの項目は、ほとんど経験していなかった。他者から阻害される不安を解消するために、「嫌われないように」「傷つかないように」行動するため、集団内のメンバーが相互に規制し合い、他とは違う意見や行動をできるだけ避けるようになる。その結果、相手を非難したり攻撃したりするような行動はお互いに控えるようになっていのではないかと考える。

しかし、このような GW での行動は、結果として、「自分の言いたいことが、相手にうまく伝わらなかった」「G メンバーと意見が食い違った」「GW 中、何をしゃべったらいいのかわからなく

なった」といった『不信劣等』因子や『配慮過多による疲労』因子に含まれるようなストレスを経験することとなっているといえる。

また「GWの好き嫌い」との関連性では、30項目すべてに有意な相関があった。GWの好き嫌いの点数は、平均3.44点であり、GW好きが7割を超えており、比較的GWは好きな学生が多かった。またGW内での対人ストレスの経験は、GWの好き嫌いに有意に関連していることが示唆された。特に「GWの時間がとても苦痛だと感じた」の項目とは、やや強めの相関があり、GWが苦痛だと感じる人が多いほど、GWも嫌いである可能性がある。また、抽出された4つの因子との関連性においては、第2因子の「不信劣等」因子とやや強い相関があった。「言いたいことが伝わらない」「何をどのように話せばよいかわからない」「信頼されていない」など、GWにおいて自分自身の話し合うためのスキルが未熟であることによって、他者から不信感を抱かれたり、自分自身が劣等感を感じたりするような事態が多いほど、GWは嫌いになる可能性が示唆された。

このようなGWの対人ストレスの様相から、学生が体験しているGWについて考察すると、人間関係に波風を立てないように、無難にその時間を過ごすことに注力することで、本来のGWの目的である課題解決や創造性が疎かになってしまっている状況が鑑みられる。話し合いのスキルが未熟なため、軋轢を解消するような積極的な行動を避けることで、話し合いスキルを活用し、スキルを磨く機会が減少し、さらにGWが苦手になる負のループにはまることになる。

21世紀に求められる能力⁹⁾として、人間関係を大切にしながら、集団で協力して課題を解決する能力が挙げられる。これは「協調的で創造的な社会」をつくるために必要な能力である。協調的で創造的な社会で働くためには、親しくない人とも、お互いが建設的に異なる意見を交換しながら軋轢を解消し、新しい解を作り出すような集団活動・GWができる能力の育成が必要と思われる。

今回、大学と専門学校の施設間の比較も行った。すべての項目で、4年制大学の方が対人ストレスの経験も少なく、GWが好きである者が多かった。大学と専門学校では、在籍している学

生の学力差やスキルの差、さらにGWの実施方法なども異なると考えられる。卒業後は同じ看護職として同じ職場で働く可能性がある者同士であるが、基礎教育におけるこれらの差は、専門職としての能力差になる可能性もある。今後はより詳細な分析が必要と考える。

2. GW 対人ストレス内容の因子構造

GW 対人ストレス 30項目について、因子分析を行ったところ、4つの因子が抽出でき、因子ごとの信頼性係数も、0.8から0.9と高い信頼性が得られた。また、4因子の累積寄与率も60%程度あり、GWにおける対人ストレスを測定するには十分な寄与率である。

第1因子の『配慮過多による疲労』は11項目から構成されている。橋本⁶⁾の対人ストレスでいえば、「対人摩耗」因子に近い内容である。日常的な対人関係のなかでもよく起こるような配慮ではあるが、それをGWのなかでし過ぎることで気疲れ、疲労感を伴うような事柄を表している。第2因子の『非難攻撃』は10項目から構成されている。橋本⁶⁾の対人ストレスでは、「対人葛藤」因子に近い内容である。GWの中で、他者から社会の規範では望ましくない非難や攻撃を受けるような事柄を表している。第3因子の『不信劣等』は7項目から構成され、橋本⁶⁾の対人ストレスでは、「対人劣等」因子に近い内容である。GW内で、話し合いに必要なスキルの欠如や他者と比較してうまくいかないといった劣等感を抱くような事柄を表している。第4因子の『気掛かり』因子は2項目から構成される。GW内で、メンバーが嫌な思いをしていないか、他者から自分がどのようにみられているかといった周囲の状況を気掛けることで自分自身が消耗するような事柄を表している。

寄与率や信頼性も高く、全体としてはGWにおける対人ストレスを調査する指標として十分だと思われるが、同一質問項目で、2つ以上の因子にまたがって因子負荷が0.4以上ある項目があり、質問内容や文言の再検討が必要と考える。また、第4因子『気掛かり』は、2項目で1因子を構成しており、独立した因子としては不十分と考える。

今後、質問項目や質問内容、文言などを再検討するとともに、外部指標との比較もしながら、調査票としてさらに精緻化する必要がある。

3. 研究の限界・課題

今回は、教育内容の違いを配慮して大学、専門学校ともに一校ずつを対象とした。一部の学生を対象とした結果であり、一般化をすることは難しいため、今後看護学生以外にも対象を増やし、検討を加える必要がある。また、GWの効果には、対人ストレス以外にも多くの要因が関連しているため、それらの要因にも考慮して研究を進める必要がある。

付記

本研究にご協力いただいた A 大学および B 専門学校の学生の皆様には心より感謝申し上げます。

本研究の一部は、第 34 回日本看護学教育学会（東京）において発表した。

利益相反

開示すべき利益相反に関連する事項はありません。

引用文献

- 1) 溝上慎一 (2014). アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換, 7, 東信堂, 東京.
- 2) リチャード・S・ラザルス, スーザン・フォルクマン (1984) / 本明寛他 (監訳) (1991), ストレスの心理学: 認知的評価と対処の研究, 実務教育出版, 東京.
- 3) 岡田努 (1993). 現代の大学生における“内省および友人関係のあり方”と“対人恐怖的心性”との関係, 発達心理学研究, 4 (2), 162-170.
- 4) 土井隆義 (2014). つながりを煽られる子どもたち: ネット依存といういじめ問題を考える, 岩波書店, 東京.
- 5) 木村忠正 (2012). デジタルネイティブの時代: なぜメールをせずに「つぶやく」のか, 平凡社, 東京.
- 6) 橋本剛 (2005). 対人ストレス尺度の開発, 人文論集, 静岡大学人文学部人文学科研究報告, 56, 45-71.
- 7) 橋本剛 (1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み, 社会心理学研究, 13 (1), 64-75.
- 8) 久田満, 丹羽郁夫 (1987). 大学生の生活ストレス測定に関する研究: 大学生用生活体験尺度の作成, 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 社会学心理学教育学, 27, 45-55.
- 9) 勝野頼彦, 他 (2013). 教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則, 平成 24 年度プロジェクト研究報告書, 国立教育政策研究所.